

中学生の部



ありふれた水

東松島市立矢本第二中学校 2年 齋藤 有那

『みずってなんだろう？』

幼稚園児の頃から純粹にそう思ったことがある。幼稚園で泥遊びをしたときに透明な水が茶色く濁るのを見たり、入れたのは水なのに製氷機からは氷が出てきたりと不思議に感じたからだ。

でも、そう感じるができるのはとても幸せなことなのかもしれない。蛇口をひねればきれいな水が、ふろ自動のボタンを押せば温かい水が、手をかざせば水が流れ、プールでは皆笑顔ではしゃいでいる。この私達にとっての日常を知らない人が世界にはいるのだから。

私が遊ぶために使った泥水を生活用水として使っている人が世の中にまだいるということを小学生の頃に知り、とても信じられずにいた。井戸が無く、水道も通っていない。何キロも先のただの水溜りまで子供がバケツを持って歩いて汲みに行く。そんな映像を私は見たことがある。同じ人間なのに何もかもが私達の生活とかけ離れている過酷な生活を送っているのを見てぞっとした。

普段は何も考えず使っていた水が他の地域にとってはとても珍しいものであると知って今一度自分の水の使い方について考えなくてはいけないと思った。その前に日本がどのような取り組みをしているか調べてみることにした。

まず現状として二千十八年の国土交通省の調査によると、水道水を本当に安全に利用できる国はたった九か国と二都市のみだということが分かった。その中に日本が入っており、アジアの他の国はアラブ首長国連邦しかないということだった。自分が思っていた以上に安全に水を使える国が少なく、とても驚いたと同時になぜこんなに少ないのかが気になった。

調べてみた結果どうやら水道水を安全に利用できない理由の多くは国土が広くインフラ整備ができなかったり、乾燥地帯で水源を確保することが困難だからという理由であることが分かった。発展途上国には水道自体がない国もあり、お金も知識も行き届いていないという。

そこで日本は水道分野の国際協力として様々な国に水道事業者を派遣したり、募金などで集めたお金を寄付したりしていることを知った。

自分の知らないところで様々な活動が行われていることを知り、逆に自分自身でできることについて調べてみることにした。

調べてみて自分ができることは、歯磨きのときは水を止めたり、水洗トイレを使う際は「小」のボタンを押したり、お米の研ぎ汁は植木に撒いたりなどの節水だった。このことが二酸化炭素排出の削減や省エネにもつながるということだった。水は限りあるものなのでこれからは節水を意識して環境に優しい生活をしていきたいと思った。

また、水の大切さ、水のあるありがたみを知り、これからの社会がより良いものになるように私たちが第一歩を踏み出す必要があるということを一人数多くの人に知ってもらいたい。

一人一人がこのことを意識し、私生活を見直してみることで全世界の蛇口から「水」と「幸せ」が出てくることを私は心から願っている。